

---

---

## 研究報告

---

---

秀明大学看護学部紀要  
P.1-8 (2023)

# 産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴

## Characteristics of child rearing difficulties experienced by primiparas in the first month after giving birth

美濃口真由美<sup>1)</sup>

Mayumi Minoguchi

### 要 旨

**目的：**産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を明らかにすることであった。

**方法：**産後1ヵ月健診を受診した初産婦を対象に無記名自記式質問紙調査を留め置き法にて実施した。得られたデータは、Krippendorff (1989) の手法を参考に、内容分析にて産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を推論した。本研究は、国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号 18-1g-133）を得て実施した。

**結果：**産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴として【授乳が難しい】【児の世話が難しい】【母親役割以外のネガティブな感覚】【児に対する愛着形成が進まない】の4カテゴリーと16サブカテゴリーからなる特徴が抽出された。

**結論：**産後1ヵ月の初産婦の育児困難感には、授乳が難しい、児の世話が難しい、母親役割以外のネガティブな感覚、児に対する愛着形成が進まないといった特徴があった。産後1ヵ月の初産婦には、育児困難感の特徴に応じた支援が提供できるような育児支援体制を構築していく必要性が示唆された。

**キーワード：**産後1ヵ月、初産婦、育児困難感

**Key Words：**one month after giving birth, primipara, child-rearing difficulties

### I. 緒言

1970年代頃から、わが国では育児期の母親が抱える困難、負担、心配、不安および母親の精神保健が注目を浴び始めた<sup>1)</sup>。1980年以降、母親の育児不安・育児ストレスに着目した研究が積み重ねられ<sup>2)</sup>、1990年代になると育児不安の本体は育児困難感で、育児への困惑と子どもへのネガティブな気持ちから成る心性であると指摘された<sup>3)</sup>。また、井田<sup>4)</sup>は、母親の持つ育児困難感を概念分析し、育児困難感とは、母親としての的確性に欠けるという認識に陥り、育児全般に対して自信の持てない母親自身のネガティブな感覚であると定義し、母親自身のネガティブな感覚として、育児をする自分との葛藤や精神的負担を含めた。この

ように、育児困難感とは、子どもへの気持ちを含めてとらえるか、育児に限らず母親自身の要因を含めてとらえるのかなど、研究者によって一致していない面があり、まだ十分に解明されているとはいえない。また、育児困難感とは、母親の抑うつに関連し<sup>5) 6) 7)</sup>、母親の抑うつが母子の愛着形成に影響すること<sup>8)</sup>、あるいは子ども虐待のリスク要因であることが指摘されており<sup>9)</sup>、育児困難感の軽減を支援することは、子ども虐待発生予防においても重要である。

産褥期にある産後1ヵ月は、身体的回復期間であるとともに、出産により母乳分泌が開始されるといった身体的変化が著しい時期である。島田ら<sup>10)</sup>は、全国の産後1ヵ月の母親3,852名を対象に、母子の心配事について尋ねたところ、母親の67%が睡眠不足で疲労感があり、15%の母親が育児放棄感や自信喪失感を経験したと回答し、質問項目のすべてで初産婦が有意

---

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

に多かったことを報告している。また、初産婦は、産後1ヵ月までの育児相談に関する支援ニーズが高い<sup>10)</sup>。

産後1ヵ月の初産婦を対象にした先行研究で、遠藤ら<sup>11)</sup>は、子育てで困った場面における体験から、初めての子育てをする1ヵ月は、様々な否定的感情を伴う体験をしながらも児の欲求を読み取り、我が子がなんとなくわかるようになってきた段階であることを示唆している。佐々木ら<sup>12)</sup>は、産後1ヵ月間における母親の児の泣きの解釈の変化を明らかにし、出産施設退院時に児の泣きの原因を理解することができずにいた母親が産後1ヵ月頃になると児の泣きの原因について判別できるようになっていたことを指摘している。しかし、岡本ら<sup>13)</sup>は、産後1～2ヵ月までの初産婦を対象にした調査で、30名中19名(63.3%)が持続する泣きに対処した後も子どもが泣き止まず、母親が万策尽きた危機状態にあったことを示唆しており、必ずしも誰もが順調なプロセスをたどるとは限らない。児の欲求の読み取りや児の泣きに対応するといった母親になる当然の経験は、産後の身体的回復過程にある初産婦にとって、身体的・心理的危機状態に関連し、これが育児困難感の一側面である可能性がある。また、産後1ヵ月の母親を対象とした調査で、育児困難感<sup>14)</sup>、年齢<sup>15)</sup>、抑うつ<sup>5) 6) 7)</sup>、夫との関係<sup>16)</sup>、夫の家事育児参加満足度<sup>6)</sup>、夫の子育て参加<sup>7)</sup>、家族機能<sup>6)</sup>との関連が指摘されている。このような育児困難感に関連する要因は、産後1ヵ月時の母親が何らかの葛藤を抱える存在で、母親になる過程には何らかの支援が必要であることを発信してきた。しかし、初めて育児をする女性が体験する現実的な育児困難感は見えてこない。

健やか親子21(第2次)<sup>17)</sup>において育児上の困難感を感じる親に寄り添う支援は政府の重点課題の一つになっている。育児困難感を感じる産後1ヵ月の初産婦に寄り添う支援の示唆を得るためには、産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を明らかにする必要があると考える。そこで、本研究の目的は、産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を明らかにし、育児困難感を緩衝するための看護の方向性を導き出すことである。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象者

本研究は、関東地区にある周産期センター、産科施設、産科クリニックの3施設で出産し、産後1ヵ月健診に来院した日本人の初産婦51名を対象とした。

### 2. データ収集方法

出産施設の産科外来にて、2019年3月～4月の期間に、無記名自記式質問紙調査を留め置き法にて実施した。調査内容は、対象者の特性として、年齢、配偶者の有無、職業の有無、分娩方法、喫煙の有無、妊娠・分娩時の異常、退院後に主に過ごした場所、新生児の入院歴、授乳方法について尋ねた。調査内容は、現在、育児に困難感(困った・悩んだ)があるかについて2件法で尋ねた。また、育児をしていて最も強く悩んだことおよび赤ちゃんに対する母親の気持ちについて、できるだけ具体的に記述することを依頼した。

### 3. データの分析

個人属性は単純集計した。質問紙で得られた記載内容は、Krippendorff<sup>18)</sup>の内容分析を参考にした。内容分析とは、データをもとにそれが組み込まれた文脈に関して再現可能でかつ妥当な推論を行うための1つの調査技法である<sup>18)</sup>。質的研究をする場合に注意しなければならないのは、分析する記録単位を明確にすることである<sup>19)</sup>。本研究においては、一文脈を記録単位とし、文脈にある特定の特徴を同定することにより育児困難感を推論した。具体的な手順としては、記述された文章の意味を一つひとつ読み解き、意味内容を損なわないように、主語などを補足しながら内容がより明確になるように記述し、記録単位を作成した。作成した記録単位に含まれる類似した意味内容を探し、それらを的確に表す表現へと置き換えるサブカテゴリーを作成し、共通する特徴が含まれるサブカテゴリーを集め、さらに抽象度をあげカテゴリーとした。以上のプロセスから産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を推論した。分析にあたって、育児をしていて最も強く悩んだことについては、記述されたすべての文脈を分析対象とし、母親の赤ちゃんへの気持ちについては、否定的な感情の記述を抽出した。分析の妥当性として、母性看護学分野と精神看護学分野のスペシャリストにスーパーバイズを受けた。

### 4. 用語の操作的定義

本研究において、育児困難感<sup>14)</sup>は、育児への困惑と子どもへのネガティブな気持ちから成る心性および母親役割以外のネガティブな感覚をさす。

### 5. 倫理的配慮

本研究は、国際医療福祉大学倫理委員会の承認(承認番号18-Ig-133)を受けた。参加募集にあたっては、研究協力施設の施設長または看護局長に対し、事前に文章および口頭で研究の趣旨と調査内容について説明

し、調査協力の承諾を得て実施した。研究対象者候補者へは、研究の趣旨と調査内容について、研究協力は自由意思であること、研究に参加いただけない場合でも診療に不利益が生じないこと、不投函または白紙での投函でも構わないこと、プライバシーは守られること等の倫理的配慮について文書にて説明した。研究協力の同意と撤回については、投函をもって同意とみなすこと、無記名のため投函後の協力撤回はできないことを明記し、投函のあった者を研究対象者とした。

### Ⅲ. 結果

回収数 42 名 (82.4%) のうち、白票および内容データの欠損を除く 39 名 (76.5%) を分析対象とした。

#### 1. 対象者の特性 (表 1)

対象者の平均年齢は、30.1 歳であり、20~34 歳以下が 28 人 (71.8%) であった。配偶者ありが 37 名 (94.9%) で配偶者なしが 2 名 (5.1%) であった。職業は、職業ありが 22 名 (56.4%)、職業なしが 17 名 (43.6%) であった。周産期状況では、分娩方法が経膈分娩であ

表 1 対象者の特性

		Mean	N=39 SD
年齢		30.1 ±	6.1
		n ( % )	
19歳以下		2 ( 5.1 )	
20~34歳以下		28 ( 71.8 )	
35歳以上		9 ( 23.1 )	
配偶者	あり	37 ( 94.9 )	
	なし	2 ( 5.1 )	
職業	あり	22 ( 56.4 )	
	なし	17 ( 43.6 )	
喫煙の有無	あり	2 ( 5.1 )	
	なし	36 ( 92.3 )	
	無回答	1 ( 2.6 )	
分娩方法	経膈分娩	32 ( 82.1 )	
	帝王切開	7 ( 17.9 )	
妊娠・分娩時の異常	あり	17 ( 43.6 )	
	なし	20 ( 51.3 )	
	無回答	2 ( 5.1 )	
新生児が入院	している	1 ( 2.6 )	
	していない	38 ( 97.4 )	
退院後主に過ごした場所	自宅	11 ( 28.2 )	
	実家	27 ( 69.2 )	
	無回答	1 ( 2.6 )	
授乳方法	母乳	12 ( 30.8 )	
	人工乳	3 ( 7.7 )	
	混合	20 ( 51.3 )	
	無回答	4 ( 10.3 )	
育児困難感	あり	25 ( 64.1 )	
	なし	13 ( 33.3 )	

った人が32名(82.1%)、帝王切開が7名(17.9%)、妊娠・分娩時に異常があった人は17名(43.6%)、異常がなかった人は20名(51.3%)であった。新生児が入院し母子分離にある人が1名(2.6%)、新生児が入院していない人が38名(97.4%)であった。退院後の生活として、退院後主に過ごした場所が実家の人が27名(69.2%)で、自宅の人11名(28.2%)より多かった。授乳方法は、母乳が12名(30.8%)、人工乳が3名(7.7%)、混合が20名(51.3%)で混合栄養が最も多かった。育児困難感があると回答した人は、25名(64.1%)、ないと回答した人13名(33.3%)より多かった。

## 2. 産後1ヵ月の初産婦の特徴(表2)

産後1ヵ月の初産婦の育児困難感には、4つのカテゴリと16のサブカテゴリに集約された。カテゴリは【 】、サブカテゴリは[ ]、記録単位は「 」で示した。

### 1) 授乳が難しい

産後1ヵ月の初産婦は「母乳をあげても寝ないのは母乳が足りていないのかわからない」など母乳分泌量が赤ちゃんのニーズを満たしているのかわからないこ

とや「赤ちゃんが吸い付かなかった」ことに悩んでいた。それらから、サブカテゴリとして[母乳(ミルク)が足りているのかわからない][赤ちゃんが乳首に吸い付かない][母乳が出ない][授乳に時間がかかるので悩む][母乳(ミルク)を吐いたときに心配で悩んだ]、カテゴリとして【授乳が難しい】が構成された。

### 2) 児の世話が難しい

産後1ヵ月の初産婦は「24時間生活する中ですべての行動が当たっているのか不安だった」「ミルクもおむつもかえたのに抱っこしても泣いているので困った」と、初めての育児に戸惑いを感じていた。それらから、サブカテゴリとして[ひとつひとつが初めてなので悩む][どうして泣いているのかわからない][夜中に赤ちゃんが泣きやまない][赤ちゃんの異常の見分け方がわからない]、カテゴリとして【児の世話が難しい】が構成された。

### 3) 母親役割以外のネガティブな感覚

産後1ヵ月の初産婦は「出産時のからだのダメージが回復していない時、からだの痛みと赤ちゃんの対応でしんどくなった」という身体的な苦痛、「眠れないので悩んだ」「何度も号泣してしまった」と精神的に

表2 産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴

カテゴリ	サブカテゴリ
授乳が難しい<20>	母乳(ミルク)が足りているのかわからない<7>
	赤ちゃんが乳首に吸い付かない<3>
	母乳が出ない<2>
	授乳に時間がかかるので悩む<4>
	母乳(ミルク)を吐いたときに心配で悩んだ<4>
児の世話が難しい<28>	ひとつひとつが初めてなので悩む<5>
	どうして泣いているのかわからない<11>
	夜中に赤ちゃんが泣きやまない<6>
	赤ちゃんの異常の見分け方がわからない<6>
母親役割以外のネガティブな感覚<12>	身体が限界な中での育児がづらい<2>
	睡眠不足がづらい<4>
	精神的な限界<2>
	役割をこなせるのか悩む<4>
児に対する愛着形成が進まない<11>	赤ちゃんを産んだ実感がわからない<2>
	育てられるか心配<3>
	かわいいと思う余裕がない<6>

<>は対応する記録単位数

危機的な状況を体験していた。一方、「母親として、家事、育児を完璧にこなせるか不安」「職場復帰について悩んだ」という役割葛藤を感じていた。それらから、サブカテゴリーとして「身体が限界な中での育児が辛い」「睡眠不足が辛い」「精神的な限界」「役割をこなせるのか悩む」、カテゴリーとして【母親役割以外のネガティブな感覚】が構成された。

#### 4) 児に対する愛着形成が進まない

産後1ヵ月の初産婦は「まだ実感がわからない部分がある」と、出産したことだけでは母親としての実感が持てない部分があった。また「かわいい、いとおしい、大事にしたいと思うまでの余裕がない」という記述があった。それらから、サブカテゴリーとして「赤ちゃんを産んだ実感がわからない」「育てられるか心配」「かわいいと思う余裕がない」、カテゴリーとして【児に対する愛着形成が進まない】が構成された。

## IV. 考察

### 1. 対象者の特性

育児困難感があると回答した人は、25名(64.1%)で、ないと回答した人13名(33.3%)より多かった。これは、29.1%に育児困難感があったという経産婦を含む報告<sup>20)</sup>より2.2倍多かったため、初産婦は経産婦より育児困難感を抱きやすいと考えられる。

### 2. 産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴

#### 1) 授乳が難しい

産後1ヵ月の初産婦は「母乳(ミルク)が足りているのかわからない」「赤ちゃんが乳首に吸い付かない」「母乳が出ない」「授乳に時間がかかるので悩む」「母乳(ミルク)を吐いたときに心配で悩んだ」と母乳育児を継続することに悩んでいた。

橋爪<sup>21)</sup>は、産後4ヵ月の母親を対象に母乳育児の困難感を調査したところ、自分なりの母乳育児ができるようになったと感じた時期は早いもので産後1ヵ月、最も多かったのが産後2～3ヵ月であることを報告している。産後1ヵ月時点は、自分なりの母乳育児ができるようになる過程にある可能性がある。

上原<sup>22)</sup>は、退院時にうまく授乳ができないときの対応や授乳時の抱き方・吸わせ方に自信がなかった初産婦は、産後1ヵ月の母親としての自信に影響していたことを指摘している。また、Brown A. et al.<sup>23)</sup>は、産後0～6ヵ月児を持つ母親を対象にした調査で、母乳不足や疲労困憊などの身体的困難や痛みのために母乳育児をやめたという理由が産後うつ予測因子で

あったことを報告している。母乳育児支援は、出産前はプレママ教室や妊婦健康診査で、出産後は入院期間で具体的な支援が実施され、入院期間での習得が難しい場合は、母乳外来および産後1ヵ月健診での継続した支援から、母親が母乳育児継続に自信を持つことができる具体的で個別的な母乳育児支援が実施されている。その際には、母乳育児支援とともに心理的サポートをしていくことが重要であると考えられる。しかし、産後1ヵ月の初産婦は、専門家による育児相談や家庭訪問のニーズが多い<sup>10)</sup>一方、授乳に対する困難感を感じただけ早く解決したいという思いから、インターネット検索をしたり、家族や友人に相談したりしている<sup>24)</sup>。母乳育児に困ったときには、いつでも専門家に相談できるような支援体制を構築していく必要があると考える。

#### 2) 児の世話が難しい

産後1ヵ月の初産婦は「ひとつひとつが初めてなので悩む」「どうして泣いているのかわからない」「夜中に赤ちゃんが泣きやまない」「赤ちゃんの異常の見分け方がわからない」と、児の特徴をつかみ世話をすることに悩んでいた。

多くの母親は、出産施設入院中に母子同室し、母子相互作用から児の要求への応答を実践し、自信が持てない母親に対しては、その都度育児支援を行っている。しかし、母親はどうして泣いているのかわからないと悩んでいた。梅崎<sup>25)</sup>は、産後1ヵ月に、子どもがよく泣くことが初産婦の抑うつに関連していたことを報告している。また、前原<sup>26)</sup>は、高年初産婦を対象にしたコホート調査の結果、産後1ヵ月時に児の合図の読み取りと要求への応答に自信がないこと、母親としての自己肯定感が低いことが産後2ヵ月の育児ストレスの予測要因であったことを明らかにしている。どうして泣いているのかわからないという母親の悩みは、抑うつ状態やその後の育児にまで影響する可能性があるため、困ったときにいつでも専門家に相談できるような継続した支援が必要である。

岡<sup>27)</sup>は、パートナーからの情緒的サポートが夫婦で育児を頑張れるという自信に繋がり、佐藤<sup>28)</sup>は、夫婦関係の親密さが育児肯定感情の高さに関連することを示唆しており、夫の存在が産後1ヵ月の初産婦の育児の自信と肯定感に重要な役割を持つ。今回の調査で、69.2%の母親が退院後に実家で過ごしていた。母親は、退院後に里帰りすることで、実母から多様なサポートを得ることはできるが、夫からの情緒的支援が

十分に得られない可能性もある。母親が里帰りしても、夫からの情緒的支援が得られるように夫婦間、家族間の支援体制を調整していく必要がある。

### 3) 母親役割以外のネガティブな感覚

産後1ヵ月の初産婦は「身体が限界な中での育児が辛い」「睡眠不足が辛い」「精神的な限界」「役割をこなせるのか悩む」と、身体的回復過程にありながら、24時間を育児に拘束されることで精神的に限界の状態にある一方、役割葛藤や職場復帰についての悩みもあった。

井田<sup>4)</sup>は、母親の持つ育児困難感を概念分析し、育児困難感の属性として、自分との葛藤、精神的負担を含めている。本研究では、産後の母親自身が感じるつらさを含めて母親役割以外のネガティブな感覚ととらえた。また、家事育児をこなせるか不安などの役割葛藤は、産後1ヵ月から4ヵ月までの経産婦を含む先行研究で抽出されている<sup>29)</sup>。しかし、本研究において、産後1ヵ月の初産婦においても役割葛藤が存在することがわかった。さらに、職場復帰については、先行研究<sup>29)</sup>では抽出されていない。

近年、育児休業取得率は出産した女性のおよそ80%程度で推移しているが<sup>30)</sup>、第1子出産を機に離職する女性の割合はなお46.9%と高く、仕事と子育ての両立への負担が就業継続の大きな障壁となっている<sup>31)</sup>。岡本は<sup>32)</sup>、結婚・出産までに形成してきた個人としてのアイデンティティと新たに母親になることによって獲得される母親アイデンティティを自己の中で両立させるのは必ずしも容易ではないと指摘している。これは、現代においても継続された課題であると考えられる。乳幼児を対象にした研究ではあるが、豊田ら<sup>33)</sup>は、母親として、個人としてのアイデンティティの双方の達成度が高い母親は、双方のアイデンティティ達成度が低い母親に比べて育児困難感が低かったことを報告している。本研究の対象者の有職率は56.4%であったが、およそ60%の女性が育児をしながら就業を継続する中、母親になる過程にある産後1ヵ月であっても、仕事と子育ての両立の悩みが存在していることから、母親役割獲得を支援するとともに、母親役割以外にも支援していくことが必要であると考えられる。

美濃口ら<sup>34)</sup>は、母親として、個人としてのアイデンティティの双方の達成度が高い母親は、そうでない母親より非親族の支援者数が多かったことを示し、支援者数が多いほど多様な支援者から母親のニーズに合った支援が得られる可能性を示唆し、多様なメンバー

からなる育児ネットワークを構築していく必要性を示唆している。育児に専念している母親は、閉塞的な状況にあると考えられる。新たに母親役割を獲得している初産婦には、母親が有用な情報を得てニーズを充足できるような育児ネットワークを構築していくことが必要である。

### 4) 児に対する愛着形成が進まない

産後1ヵ月の初産婦は「赤ちゃんを産んだ実感がわからない」「育てられるか心配」「かわいいと思う余裕がない」が存在していた。

中島<sup>35)</sup>は、母親の愛着とは、母親と子どもの間に発達し、長期に持続する情愛と定義している。児に対する愛着は、育児をする中で日々促進されると考えられるが、産後1ヵ月時点では、赤ちゃんを産んだ実感がわからない、かわいいと思う余裕がないといった母子愛着形成が発達途上にある可能性がある。

有本ら<sup>36)</sup>は、産後1ヵ月の母親を対象にした調査で、出産満足度が高いものは、児に対する愛着が高かったことを示唆している。臨床では、妊娠期のバースプランと産後のバースレビューから、母親が主体的に出産に取り組むことや母親が肯定的に出産体験を受け止めるといった出産満足感を促進するケアを実践している。このようなケアが児への愛着を促進している可能性もある。一方、母親の抑うつが母子の愛着形成に影響すること<sup>8)</sup>、あるいは子ども虐待のリスク要因であることが指摘されている<sup>8) 9)</sup>。児に対する愛着形成が進まない母親に対しては、母親の児に対する気持ちおよび抑うつ傾向の有無や夫や周囲のサポート状況を確認し、場合によって、精神科や臨床心理士など多職種と連携した支援が必要であると考えられる。

### 3. 看護への示唆

出産後の母親のほとんどが受診する産後1ヵ月健診は、産後の母子の健康状態を把握する機会であるとともに助産師が初産婦に寄り添う好機である。すでに多くの出産施設では、助産師による産後1ヵ月健診を活用した保健指導が実施されているが、その際に助産師は、本研究で初産婦の育児困難感として明らかになった【授乳が難しい】【児の世話が難しい】【母親役割以外のネガティブな感覚】【児に対する愛着形成が進まない】という4つの特徴をアセスメントし、育児困難感を緩衝するための支援に活用してほしい。中でも、本研究で初めて明らかになった役割葛藤や職場復帰について、母親のニーズを充足することも必要である。また、本研究において、母親の記述にソーシャルサポ

ート不足がなかったことから、初産婦は、サポート不足に気が付かず、助けを求められないまま育児困難感を抱いている可能性も考えられる。

厚生労働省は、産婦健康診査支援事業として、産後うつ予防や新生児への虐待予防等を図るため、産後2週間、産後1ヵ月など出産後間もない時期の産婦に対する健康診査（母体の身体的機能の回復、授乳状況及び精神状態の把握等）に係る費用を助成することにより、産後の初期段階における母子に対する支援を強化し、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援体制を整備した<sup>37)</sup>。本研究結果で明らかになった育児困難感を緩衝することができれば産後うつや新生児虐待を予防することにつながる可能性もある。また、産後1ヵ月健診の結果、継続した支援が必要と認められた初産婦に対しては、地域と連携し、産後ケアまたは乳幼児全戸訪問などから初産婦のニーズを充足できるような支援をすることで、妊娠・出産施設から地域への切れ目のない支援が円滑に進む支援体制が構築できるのではないかと考える。

#### 4. 研究の限界

データは、関東地区の3施設より収集しており、一般化には限界がある。また、本研究では、産後1ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴を明らかにしているが、具体的に測定できるレベルの検討には至っていない。今後は、産後1ヵ月の初産婦の育児困難感を測定する尺度開発が課題である。

## V. 結論

本研究において、産後1ヵ月の初産婦の育児困難感には、授乳が難しい、育児が難しい、母親役割以外のネガティブな感覚、児に対する愛着形成が進まないという特徴が明らかになった。産後1ヵ月の初産婦の育児困難感を緩衝するためには、産後1ヵ月健診を活用して、育児困難感の特徴に応じた育児支援を構築していく必要性が示唆された。

## 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただいた研究協力者の皆様に深く感謝致します。本研究は、国際医療福祉大学大学院に提出した博士論文の一部に加筆修正したものである。また、本研究の一部は、一般社団法人日本看護研究学会第46回学術集会にて発表した。本論文に開示すべき利益相反(COI)はない。

## 引用文献

- 1) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田真理, 他: 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連, 心理学研究, 64 (6), 409-416, 1994.
- 2) 川崎道子, 宮地文子, 佐々木明子: 育児不安・育児ストレスの測定尺度開発に関する文献検討(1983年～2007年), 沖縄県立看護大学紀要, 9, 53-60, 2008.
- 3) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する臨床的研究Ⅱ—育児不安の本態としての育児困難感について—, 日本総合愛育研究所紀要, 32, 29-47, 1996.
- 4) 井田歩美: わが国における「母親の育児困難感」の概念分析—Rodgersの概念分析法を用いて—, ヒューマンケア研究学会誌, 4 (2), 23-30, 2013.
- 5) 松原直実, 堀田法子, 山口孝子: 育児期の母親の抑うつ状態に関する縦断的研究, 小児保健研究, 71 (6), 800-807, 2012.
- 6) 神崎光子: 産後1ヵ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題—家族機能との因果的関連, 女性心身医学, 19 (2), 176-188, 2014.
- 7) 松枝加奈子, 菊池良太, 山崎あけみ: 産後1ヵ月間の母親の家族コミュニケーションの実態と育児困難感に関連する要因, 家族看護学研究, 24 (2), 164-173, 2019.
- 8) Muzik M, Bocknek EL, Broderick A, et al.: Mother-infant bonding impairment across the first 6 months postpartum: the primacy of psychopathology in women with childhood abuse and neglect histories, Arch Womens Ment Health, 16 (1), 29-38, 2013.
- 9) 厚生労働省 (2022.12.4): 子ども虐待対応の手引き <<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/00.html>>
- 10) 島田三恵子, 杉本充弘, 縣俊彦: 産後1ヵ月間の母子の心配事と子育て支援ニーズおよび育児環境に関する全国調査—「健やか親子21」5年後の初経産別, 職業の有無による比較検討, 小児保健研究, 65 (6), 752-762, 2006.
- 11) 遠藤晶, 野口真貴子, 久米美代子: 新生児期の子育てで困った場面における母親の体験, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 8, 31-41, 2009.
- 12) 佐々木嗣人, 名取初美, 平田良江: 産後1ヶ月間

- における母親の児の泣きの解釈の変化, 山梨県母性衛生学会誌, 8, 55-61, 2009.
- 13) 岡本美和子, 松岡恵: 出産後1~2ヵ月における児の持続する泣きに直面した初産婦の危機状態, 女性心身医学, 8 (1), 85-92, 2003
  - 14) 鈴木七奈, 梅田和歌子, 遠藤伸子, 他: 高齢初産婦が抱く産後1か月までの育児不安の特徴, 北海道看護研究学会集録, 59-61, 2017.
  - 15) 武本茂美, 中村幸代: 児の栄養法別による育児不安および対児感情の関連, 日本助産学会誌, 25 (2), 225-232, 2011.
  - 16) 久世恵美子, 秦久美子, 中塚幹也: 産後1ヵ月の母親の「育児上のネガティブな出来事」の実態と背景因子(第1報)「育児上のネガティブな出来事」の体験, 母性衛生, 56 (2), 338-348, 2015.
  - 17) 厚生労働省(2022.8.31): 健やか親子21(第2次)ホームページ  
(<http://sukoyaka21mhlw.go.jp>)
  - 18) K. Krippendorff: Content analysis, 1989, 三上俊治他, メッセージ分析の技法「内容分析」への招待, 21-49, 東京: 勁草書房, 1989.
  - 19) 上野栄一: 内容分析とは何か—内容分析の歴史と方法について—, 福井大学医学部研究雑誌, 9 (1) 第2号合併号, 1-18, 2008.
  - 20) 宮岡久子, 佐藤君江, 堀越幸子: 褥婦の退院時と1ヵ月健診時における自己効力感と, 1ヵ月健診時の育児不安および育児困難感との関連, 母性衛生, 55 (4), 776-782, 2015.
  - 21) 橋爪由紀子, 堀込和代, 行田智子: 初産の母親の母乳育児における心配事—産後4か月までに心配や困難を感じた母親へのインタビューより—, 日本助産学会誌, 32 (2), 190-201, 2018.
  - 22) 上原諒子, 中西伸子: 産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 13, 48-56, 2017.
  - 23) Brown A, Rance J, Bennett P: Understanding the relationship between breastfeeding and postnatal depression: the role of pain and physical difficulties, J Adv Nurs, 72 (2), 273-82, 2015.
  - 24) 塚田幸乃, 河島亜希子, 大田まゆみ, 他: 退院後から産後1か月健康診査までに母親が抱く授乳に対する困難感と対処行動, 母性衛生, 57 (4), 709-717, 2017.
  - 25) 梅崎みどり, 大井伸子: 初産の母親の出産後1週間以内と1ヵ月時の抑うつとそれに影響する要因の検討, 母性衛生, 55 (4), 677-688, 2015
  - 26) 前原邦江, 森恵美, 土屋雅子, 他: 高年初産婦の産後2か月における育児ストレスを予測する要因, 千葉大学大学院看護研究科紀要, 37, 27-35, 2015.
  - 27) 岡未奈, 佐々木睦子, 石上悦子: パートナーからの情緒的サポートに対する産後1か月の初産婦の思い, 香川大学看護学雑誌, 23 (1), 1-10, 2019.
  - 28) 佐藤沙織: 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関連に関する研究—育児初期の核家族に焦点を当てて—, 日本助産学会誌, 26 (2), 222-231, 2012.
  - 29) 澤田明菜, 鏡(関塚)真美, 太田良子他: 産後1か月から4か月までの母親がもつ育児ストレスと対処行動, 日本看護科学会誌, 40, 270-278, 2020.
  - 30) 厚生労働省: 「令和2年度雇用均等基本調査」の結果, 2021.
  - 31) 内閣府: 共同参画2019年5月号, 男女共同参画局, 2019.
  - 32) 岡本祐子: 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究, 日本家政学会誌, 47 (9), 849-860, 1996.
  - 33) 豊田史代, 岡本祐子: 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合—育児困難との関連—, 広島大学心理学研究, (6), 201-222, 2006.
  - 34) 美濃口真由美, 細坂泰子, 茅島江子: 育児期女性のアイデンティティ様態と育児ネットワークとの関連, 母性衛生, 61 (1), 104-111, 2020.
  - 35) 中島登美子: 母親の愛着質問紙(MAQ)の信頼性・妥当性の検討, 小児保健研究, 61 (5), 656-660, 2002.
  - 36) 有本梨花, 島田三恵子: 出産の満足度と母親の児に対する愛着との関連, 小児保健研究, 69 (6), 749-755, 2010.
  - 37) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長: 母子保健医療対策総合支援事業の実施について, 平成17年.